

「ある」から「べし」はいかにして導出できるか

信原幸弘（東京大学）

道徳は私たちが私たちのために行う実践である。そうだとすれば、私たちの本性を見極めて、それに相応しい道徳を構築するというのは、まことに理に叶っていよう。パトリシア・チャーチランドの近著 *Braintrust* によれば、道徳の基礎は自分自身に対する気遣いにある。生物はすべて自己の生存を気遣い、そのために万事をなす。しかし、生物が進化するにつれて、そのような気遣いは自分自身にとどまらず、愛着と信頼を通じて、自分から子へ、連れ合いへ、近親者へ、知人へ、そして最後には見知らぬ人にまで拡張する。このような見知らぬ人にまで拡張された気遣いこそ道徳にほかならない。

人間の本性が自己への気遣いとそれの他者への拡張にあるという考えには、多くの異論があろう。しかし、そうだとすると、ともかく人間の本性を見いだして、それに基づいて道徳を構築するということは、道徳を確固たる基盤に基礎づけるという点で、きわめて重要な試みであろう。しかしながら、この試みには、原理的な困難があるようにみえる。人間の本性は人間がじっさいにどうあるのかという事実的な次元の話であるのたいし、道徳は人間がどうあるべきなのかという規範的な次元の話である。そうだとすれば、ヒュームが指摘したように、「ある」から「べし」を、つまり事実から規範を導き出すことはできないのではなかろうか。そのような導出を行うのは、ムーアの言う「自然主義的誤謬」を犯すことではなかろうか。

この問題に対して、チャーチランドは、事実から規範を「演繹的」に導出することはたしかにできないものの、演繹よりももっと広い意味での「推理」ということなら、事実から規範を推理することはできると主張する。彼女は事実から規範の導出を「制約充足問題」として捉える。私たち人間がどのような認知的な能力や感性的な快・不快の能力、さらには身体的な能力をもつかということや、私たちが現にどのような状況に置かれているかということは、私たちに与えられた事実的な制約である。そのような事実的な制約をもっともよく満たす選択肢を見いだすことができれば、私たちは何をなすべきかを決定することができる。このようにして事実的制約から規範を導出できるというわけである。

事実から規範の導出を制約充足問題として捉えることは非常に自然な考えのように思われる。しかしながら、そう捉えることで、事実と規範のギャップがどう乗り越えられたのか、あるいはそもそもそのようなギャップはじつは最初から存在しないということになったのかどうか、チャーチランドの説明ではあまり判然としない。チャーチランドは事実的制約のなかに快・不快のような価値的な事実を含めることで、規範性をはらんだ事実を認め、それゆえ事実と規範の二分法を拒否しているようにもみえるが、必ずしもはっきりしない。本発表では、事実から規範の導出を制約充足問題として捉えた場合、その導出がいかなる性格のものと考えられるかを明らかにし、そのうえでそのような導出がどのような意味で妥当であり、自然主義的誤謬を免れているかを明確にする。